



物価の優等生

小咄 　ある日のカップルの会話

「また卵が値上がりしてたのよ。もう買うのやめようかしら」

「そうはいかないよ。卵は、僕の人生そのものなんだから」

「えっ、どういうこと？」

「君(黄身)が中心だからね」

1月のことになるが、ある日の夕方、テレビを観ていると、トッ
プニュースは値上げが続く鶏卵の話題だった。例年以上に猛威を振
るう鳥インフルエンザによる殺処分の影響も報じられていた。とこ
ろが続いて放映されたのは、なんと卵を節約しても美味しくできる
卵料理のレシピの紹介。何とか家計を節約したいという消費者の切
実な思いは理解できるものの、テレビが伝えるべき大切なことは別
にあるのではないか、という違和感を禁じ得なかった。

鶏卵は、長らく「物価の優等生」ともてはやされてきた。それは、
海外から大量・長距離輸送された輸入飼料穀物に依存するという前
提の下で、生産者の規模拡大等の努力により実現してきたものだ。

ところが、鳥インフルをはじめ、パンデミックやロシアによるウ
クライナ武力侵攻等が引き起こした世界的な飼料穀物の価格高騰は、
とても生産者の経営努力でカバーできる範囲ではなくなっている。

二つのことを考えた。一つは、国内における鶏卵生産が必要と考
えるのであれば、そのコスト増の一部は消費者もシェアすべきでは
ないか、ということ。つまり、鶏卵を、「優等生」ではない、価格
転嫁できる普通の商品にしなければならぬということだ。

もう一つは、鶏卵に限らず、飼料、肥料、エネルギーなど輸入資
材への依存を前提とした日本農業のあり方を抜本的に変革する必要
があるのでは、ということ。将来にわたって、これまでのように輸
入を安定的に継続できる可能性は、極めて小さいと考えざるを得ない。

そもそも生産資材に限らず、食料そのものの海外依存に低い自給
率も、消費者の低価格志向がもたらしたものと言える。

自戒を込めてだが、消費者には安価なものばかり求めるという従
来の思考と行動の「殻を破る」ことが求められている。そのためにも、
生産者には、エシカル、オーガニック、アニマルウェルフェア
等に配慮した質の高い商品を提供していく責務があるのではないだ
ろうか。次代を担う子どもたちにより良い社会を残していくために
も。

(忽々)